

課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業
 領域開拓プログラム（研究テーマ公募型研究テーマ）
 評価用研究成果報告書

課題		嗜好品の文化的・社会的意味			
研究テーマ名		失われた飲食文化の復活と現代に問いかけるその意義			
研究代表者	所属機関	椋山女学園大学			
	部局	国際コミュニケーション学部			
	役職	教授	氏名	伊藤信博	
委託研究費					単位：千円
平成29年度	平成30年度	平成31年度 令和元年度	令和2年度		
2,925千円	4,586千円	4,076千円	1,554千円		

1. 研究の概要

研究目的、研究内容、研究成果やその波及効果等、実施した研究の概要について、簡潔に記述してください。

【概要】

本研究は、文字資料と画像資料の位相を再統合して一体的に捉えようとする、統合・複合的な文献解釈学的方法的実践により、室町・江戸の飲食の嗜好傾向の結果を得ようとするものである。この時代に飲まれた「日本酒」は現在と大きくイメージが異なっている。そこで、このような食文化史の原点である室町時代の飲食の嗜好を古記録、絵巻や文学作品から抽出し、江戸時代に大きく発展する文化の担い手としての「飲食」への過程を明らかにすることや、現代にそれらを甦らせることを目標とする。そして、グローバル化の中で、多様な日本文化が持つ飲食文化を再考し、新たな食文化研究を発展させる。

現在の日本酒の製法とは違う『御酒之日記』に記される「重醸酒」を当時の製法に従って、占城米（大唐米）の粳米と糯米で、造酒する。さらに、室町後期や江戸初期の料理本や絵巻に描かれる「七・五・三」料理に描かれる「酒」の種類を考察することで、アルコール度の軽い酒（果物酒）から、アルコール度の高い「古酒・重醸酒」まで多様な酒があった事実、酒の肴にも酒の種類に合わせた豊富な種類が、江戸時代には「本草学」的に考察された料理として成立している可能性があったことなどを探求する。